

諸生に示す（安積良斎）

君を戒む見る勿れ墨陀の花

花下の美人に花も華を遜る

君を戒む見る勿れ墨陀の月

月下の少婦に月も潔を恥ず

先哲陰を惜しみ勤めて精研す

何の暇あつてか花月流連に耽らん

吾書生を閲する三十年

志業多くは花月に因つて捐つ

戒君勿見墨陀花 花下美人花遜華
戒君勿見墨陀月 月下少婦月恥潔
先哲惜陰勤精研 何暇花月耽流連
吾閲書生三十年 志業多因花月捐

解説 門人の遊惰に耽るのあまり、学業を廢することのなきよう戒めた詩。

語釈 ※示〓教えを示すの意。※諸生〓学生。※戒君〓君を戒める。花見に浮かれる気持ちを引締める。※勿見〓見てはいけない。※墨陀花〓隅田川堤の花。※遜華〓遜は謙遜。華は花の美しさ。美人に花も顔負けの意。※少婦〓年若い女性。※潔〓潔朗・潔清・潔静などの意。容姿が秀れていて、美しく品があることを意味する。※先哲〓前代の哲人。※惜陰〓わずかな時間も惜しむ。※精研〓細大もらさず潔く研究する。※花月〓度を過ぎた風流事。※流連〓流連荒亡の略。遊興にふけて家に帰るのを忘れること。※閲〓観に同じ。観察。※志業〓大志と学業。大志をもつて学業に志すこと。※因花月捐〓色におぼれて志を失い、学問も捨てたの意。

通釈 学生諸君。諸君に告げておく。諸君は勉学中であり、修業中の身である。墨田川のほとりで花見などに浮かれてはならない。あの近辺は、桜の花もその美しさには恥じらうほどの美人が徘徊して、酔歩の袖をひき、諸君をとりこにする。墨田川のほとりで月見などに浮かれてもならない。光の下に、月も恥じらう妙齡の女性がいて、諸君を誘惑するに違いないからだ。いったい諸君は何のために笈を負い、故郷をあとにしたのか。学業を成就せんがためではなかったか。そうした女性は諸君の固い決意も、直ぐと鈍らせ、蕩かしてしまうものなのだ。古の先哲・賢哲は、ちよつとの時間も惜しんで勉学に励んだものである。ましてや、諸君は修業中の身である。どうして花見や月見にうつつをぬかし、色香に耽る暇などがあるうか。一日たりともないはずである。私は諸君のような青襟の学生を三十年も見てきているが、せつかくの大志も学業も、多くの場合、女性の色香によって、これを捨ててしまうことが多い。くれぐれも心してほしいものである。